

□巻頭言□

学会の楽しみ方

国際医療福祉大学 学長 大友 邦

医療福祉専門職に従事している方は、職種、職位そして勤務先による差はあるにせよ、多かれ少なかれ大学卒業後も長く学会（研究会、セミナー等を含む）に関わる機会があるものと考えます。斯くいう私も、さまざまな形で放射線医学領域を中心とした学会なるものに関わってきました。今回は自分の経験をもとに、自身のスキルアップに役立てつつ「学会をいかに楽しむか」について書かせていただきます。

「はじめての学会発表」

次演者席で発表原稿を手に、ときどきしながら自分の名前が呼ばれるのを待つ。壇上で話し始めると、練習のときより早口になる。結語のスライドまでたどりついてはとしたのもつかの間、想定していない質問に立ち往生。共同演者の先輩の助け舟で、なんとか終了。はじめての学会発表はだいたいこんなものでしょう。ここで、こんな目には二度と遭いたくないと思うか、それとも緊張感がくせになるか？ 私の場合は後者だったようです。

「諸国巡礼の旅」

学会出張で、北は旭川から南は鹿児島まで、全国各地を訪れる機会がありました。

私のメインイベントである日本医学放射線学会総会で訪れた鹿児島で本場の「さつまあげ」が美味なのに驚いた記憶があります。その後、総会は広い機器展示会場が必要な関係で神戸と横浜の隔年開催となりました（最近では横浜で定置開催）。したがって、毎年異なる地域で開催される秋季臨床大会が楽しみで、盛岡、郡山、名古屋、和歌山、下関、長崎などで見聞を広げる機会がありました。他に、札幌の雪まつりと新緑の函館大沼（厚生省班会議）、アイビースクエアと倉敷散策（超音波学会）、中洲「たんや又兵衛」の絶品“さがり”（脈管学会）、京都の鰻料理と熊本的新鲜な馬刺し（磁気共鳴医学会）などが印象に残っています。また昼は学会場で、夜は居酒屋で、専門領域が同じ他施設の方々と語り合い、一生の財産となる人的なネットワークを広げることができました。

「いざ海外」

国内学会に飽き足らなくなると、めざすのは海外。毎年12月にシカゴで開催される北米放射線学会は最盛期には10万人近い参加者を誇る世界の桧舞台でした。ウイーン（ECR）、コスタデルソル（ESGAR）、パリ郊外・ベルリン（ISSR）、シンガポール（AOCR）、アンタルヤ（トルコ放射線学会）、南京（中国放射線学会）、カウアイ・マウイ（Stanford Imaging Seminar）にも出かけました。海外での発表時に立ちはだかるのは英語の壁、特に発表終了後の質疑応答です。狭い会場では演者が目の前にいるので気楽に質問が飛んでくる傾向がある一方、広い会場では声がこだまして質問が聞きづらく、いずれも苦勞しました。それでも無事終了すると気分が高揚し、また来年も、という気になるのです。

「学会を主催する」

学会カレンダーをみると、毎週全国各地で実に多くの学会が開催されているのがわかります。なぜこんなにも多いのか？ その理由の1つに、「学会は主催すると、くせになる」ことがあげられます。仲間で、テーマを決め、

特別講演・シンポジウムを企画し、プログラムを作成していく作業は、大変ではありますが、やりがいがあります。いってみれば「大人の文化祭・学園祭」です。準備万端整うと、青空の下で皆さんに集まっていただきたいと願いながら天気予報とにらめっこ。無事終了したあとの打ち上げで飲むビールの味は、まさに格別です。

「学会を楽しむ」

はじめての学会発表の緊張感、さまざまな国・地域での経験、主催した学会が無事終了したときに仲間と味わう達成感、そしてこれらの経験を通じて形成される *priceless* のヒューマンネットワーク。学会を楽しむことは、自らの専門領域だけではなく、人生を楽しむことにつながるのだと思います。